

### 「危機の時代を」

### どうしたらえるか

大江矩夫(世話人)

まず「危機の時代」という途方もない大きな問題を  
取り上げた理由を挙げておきます。人類史の中にあっ  
て危機の時代とは、それまで解決できていた諸問題が、  
今までの解決法では対処できない状態になった時代の  
ことを言います。そのような時代を具体的に日本史の  
場合と世界史の場合で考えてみます。

日本史においては、(詳細は当日レジメで紹介しま  
す)まず「卑弥呼王朝」から大和朝廷成立の時代、  
次いで「大化の改新」による「律令体制」整備の時  
代、さらに「私地私民(荘園制)」進行による、鎌倉武  
家政権(前期封建制)成立の時代、室町・安土桃山  
の戦国時代から徳川幕藩体制成立の時代、そして幕  
末・明治維新から第二次世界大戦にかけての時代です。  
そして、ここでわれわれが当面する「現代の危機」  
は、二十世紀前半から西洋文明や資本主義体制の崩壊  
の危機として自覚され、後半からは環境破壊・温暖化  
や資源の涸渇等の地球的限界や、民族・宗教的対立な

ど社会主義を含めた近代思想全般の閉塞状況が明らか  
となってきた時代です。現代の危機は、二一世紀にな  
ってますます世界の分断が進み、トランプのような独  
善的指導者が現れて、戦後の世界平和と人権拡大の中  
心であった「国際連合」の地位も危うくなってしまし  
た。新型コロナウイルスのパンデミックは、この危機  
の時代にどのような影響をもたらすでしょうか?今回  
はこのような人類が当面する危機を地球的視野から議  
論します。

内容の一部 世界的な視点で現代の危機を見る  
と、二十世紀前半の状況をマルクス主義では、帝国主  
義と独占が支配し世界大戦が引き起こされた「資本主  
義の全般的危機」の時代であり、間もなく労働者大衆  
による社会主義革命によって階級支配を中心とする諸  
課題が解決されると考えていました。また、当時の西  
洋の思想的状況は、ダーウィンの進化論が流布され、  
ヘーゲルやカント等の伝統的な理想主義・合理主義の  
限界がみえはじめ、ニーチェは「神は死んだ」と断じ、  
シュペンゲラー「西洋の没落」は列強の対立でヨーロ  
ッパが戦場になったことで現実的なものになり、主体  
性の確立を求める実存哲学が流行しました。

主流の経済学では、オーストリア学派のハイエクや  
シカゴ学派のフリードマンなどは、反社会主義の立場  
をとる新自由主義(新古典派・市場原理主義)を唱え、  
またアメリカ資本主義の繁栄によって社会主義ソ連を  
崩壊に到らせました。その後、新自由主義のもとでI  
T産業が普及巨大化(GAFAM)したことから格差  
が急速に拡大しはじめました。

現代の危機は、グローバル化した人類が、農耕の始  
まりから今日まで築き上げてきた物心両面のすべての

成果の存続を問われる局面にあります。今日の宗教的  
思想的閉塞と経済的拡大成長の限界、そして顕在化す  
る環境破壊と富の偏在(格差の拡大)による人心と社  
会の荒廃・分断は、早急に解決の見通しを付けねばな  
りません。さあどうするか?その問題の所在と解決の  
方途を議論したいと思います。



「対話」が成立するためには、

何が必要か?「コメント

今回の哲学カフェでは、対話をめぐって、いろいろ  
な角度から幅広い話しあいができたと思います。参加  
者それぞれから、切実な問題や課題が語られました。

・歩行などに「障害」を持つ人が、養護学校で自分の  
身体性のありようを語る「言葉」がないまま、教科書  
では、一方的に健常者の身体性を表現する言葉をあて  
がわれるという問題。・なんとか、対話を成立させた  
いと願っているのに、それを否定する攻撃的な発言を  
浴びせられる経験。・SNSを通じた対話では、承  
認欲求にとらわれやすくなり、同質な人たちの対話に  
なってしまうやすい。とにかく、いろいろ試みること  
で、対話の可能性を探るしかないのでは。・「いろ  
いろな会で他の人の意見に対立してまで、自分の思い  
や意見を語ることにためらいがある、俳句の句会で、  
作品を通して、少し思いを語ることは、できる。」  
・俳句自体は、面白いが、俳句や短歌が日本的な美意  
識を強制したり、共感を強制することにならないよう

警戒すべきだ。」・「家族や身近な人たちとの対話自体が、まだまだ十分ではなく、難しい」などなど。

「わかりあえるはずだ」という日本文化の考え方が、互いの意見の違いを前提とした対話を困難にしている面と、逆に、それぞれの思想や立場をのりこえようとする誠実な対話の可能性について、人々が絶望し、ニヒリスティックになってしまふという問題についてもいろいろな観点から議論されました。「みんなが同じ程度の不満を感じるような合意に到達することを、民主主義のめざすところだと考えるべきではないか」という内田樹の説得的な言葉の紹介もありました。このテーマで、再び、私たちができることについて話し合いたいと感じる、充実した時間でした。みなさん、ありがとうございました。（話題提供者永井から）

リモート形式の議論は相変わらず緊張します。しかし事前のレジメの提供があり、当日の説明でさらによく理解できました。対話や議論の相互理解には、共通の普遍的な問題意識や多様な価値観への理解が必要で、あらかじめ自身の独我性が理解できたように思います。ありがとうございました。（O）

永井さんという旧知の人が話されるので参加しました。私は、永井さんの話されることが、ほとんどすべて好きです。本日もいくつかの新鮮な知見がありました。

ところで、こんなことを書くのはどうかと思うのですが、二日前に、参加申し込みメールをしていて、ガンバって、開始前の三〇分前に帰宅したのに、参加許可メールが来ていないし、連絡の取りようも無く、約一時間も、楽しみにしていた永井さんの話を聴きそびれて、不満が溜まっていました。そこで、永井さんか

ら休憩時間に電話で、参加IDとパスワードいたたいで、ホストの許可待ちで、さらに二十分ほどロスタイムがあつて、ようやく入れたのは、その間の聞き逃し不満がさらに高まっていました。こんな不満の感想を述べたくはないのですが、自由な表現が望まれると思つたので、とりあえずは、表出しました。

テレビ・Web会議ツール「Zoom」を使つての話し合いは、私自身には4回目ですが、まだまだ新鮮です。今回の様にまったく見知らぬ人と生身の対面ではない形で、表情や上半身を見て話し合う、声だけの人もいましたが、なんかとても新鮮でした。

今回の自分の対話は、結果として、なんか言わなきゃの表出してみる…だけだったように思います。それでも、みなさんのそれぞれの生の声・意見を聴けて、理解できたこともありましたので、短い時間でしたが、とても充実した対話の時間でした。

ありがとうございました。（東京 I）  
平田オリザさんの『わかりあえないことから』を紹介されました。私もこの本は興味深く読ませてもらいました。多分、人と人は「分かり合えない」ものではないかと思ひます。資料で出された少年と先生の対話のちぐはぐさは、（力のある）先生が「分かり合えるはずだ」との考えの下で少年にたいした故だったのです。それでも「対話」が必要だとされる永井さんの思いには共感しました。（M）

今回の参加の目的のひとつにWeb上では、普段の実空間を共有する対話とは、どのような差異が見られるのかという個人的興味がありました。問のとり方で上滑りするのではという懸念も、世話役の何年もの思考が凝縮された周到なレジメにより見事に一掃されました。

それに加え、接続環境などで途切れがちになる発言者の言葉になお一層耳を傾ける自身を見出しました。我々の世代が経験する喃語を話しはじめた孫との目の中を窺いあう楽しい対話。参加者の体験としての「障碍者の言葉、這いつくばる人の言葉」の希求。これらの身体性を背後に持つ言葉や行為が共有された時、まさに、腑に落ちる対話が言葉以上に広がるように思えます。また、いみじくも、ひとりの参加者からの発言にあるように「対話には、リスペクトが必要」という当たり前で大切な言葉。a（再び）spect（視線、見ること）、respectを「大切にすること」という訳を付けた方に近い感じがします。離れていても密な二時間でした。機会があれば、黙示という対話についてお聞きしたいと思ひました。（M・O）

お詫び Iさんには大変申し訳なく、深くお詫びします。「参加希望」メールの着信については十分気をつけていたつもりでしたが、「迷惑をお掛けしました。これに懲りずまたお越しく下さい。」（SO）

### 哲学カフェ【問答連】今後の予定

四回 八月二三日

わたしとわたしたち 「線引き」ということ  
野崎康夫（世話人）

五回（特別講座） 九月二六日

### ケア労働と

BI（ベーシックインカム）

同志社大 経済学部教授 山森 亮さん（ゲスト）